

# あ い さ つ

塩竈市教育委員会

教育長 高橋 睦磨

平成23年3月11日（金）14時46分、三陸沖を震源地として発生した東日本大震災は、国内観測史上最大となるマグニチュード9.0を記録し、その後40分足らずで到達した巨大津波は東北の太平洋沿岸を中心に大きな爪痕を残しました。

特に、気仙沼市、南三陸町、石巻市、女川町、東松島市、仙台市若林区荒浜、名取市、岩沼市、亶理町、山元町を中心に多くの家屋や車が濁流に流され、たくさんの人々が犠牲になりました。本市の被害状況（平成24年11月1日現在）は、人的被害「死者」47名、「災害関連死」18名。住宅などの被害「住宅」1万943棟、「非住家」2千390棟、「車両」500台、「船舶」223隻。被害総額は、1千216億4千584万6千円。市内46か所に避難した人々は最大時8千771名を数えました。多くの港町が廃墟と化すがごとき状況の中、本市では、全ての学校が耐震工事を終えていたこともあり避難所として役立てたことは、まさに天の配剤ではないかと感謝にも似た想いが浮かびました。

思い起こすと学校現場にとって平成23年度は、まさに激闘の期間であったと思います。「児童生徒を日常に戻すこと」、「児童生徒の心のケア」、余震が続く中での「新たな防災マニュアルの作成」など待ったなしの仕事に全身全霊で当たってきた1年であったと思います。

あの日から1年8ヶ月が経ち、やっと周りの状況が見え、振り返ることができるようになってきたと思います。塩竈市内も27万8千トンもの瓦礫のほとんどが処分され、空き地が目立つものの、元の塩竈に戻ったような気がします。子どもたちにも笑顔がもどり元気に活動している様子がみられます。子どもたちも、教職員も、保護者の方々も心にゆとりがでてきたと感じます。今だからこそ当時のことを冷静に分析し、震災に対する思いや自分の行動の正否、今後のあるべき防災の在り方などについて書くことができるのではないかと思います。

今回、「3.11 塩竈っ子へ」（東日本大震災体験文集）《第2集》を小・中学生、教職員、保護者、地域の方々に寄稿していただき読ませていただきましたが、その人でなければ書けない「生の体験」、「これからの防災教育」、「これからの生き方」が綴られており、臨場感をもって伝わってくるものがありました。

「こどもは環境を選べない。可哀想という気持ちはもっていいが、その中で、何を育てていくかが我々教育者の仕事である。」この言葉は、阪神淡路大震災から復興を遂げた神戸市教育委員会総合教育センター所長 森本純夫氏の言葉ですが、目の前の傷ついた塩竈の子どもたちにいま何を語り、そして、「震災を知らない子どもたち」に何を伝えていかなければならないのか。この文集を一つの教材としていただければ幸いです。

結びに、寄稿していただいた、児童・生徒、教職員のみなさん、保護者・地域の方々に感謝するとともに、皆様の1日も早い復興をご祈念申し上げ挨拶とします。